

『刺青』と漢文学

杉 下 元 明

一

魚菜吹腥市幾場

魚菜 腥を吹く 市幾場

東都四里是中央

東都四里 是れ中央

誰言二十八間短

誰か言ふ 二十八間短しと

宛見秦橋虹彩長

宛も見る 秦橋虹彩長きを

右は明治十一年に刊行された大沼枕山『江戸名勝詩』におさめる「日本橋」である。「秦橋」は秦の昭王がつくった橋。市場にかこまれ、江戸の中心にあつて二十八間の長さを誇る日本橋の賑わいをたたえた、いかにも江戸時代の名残を感じさせる詩である。幕末・維新期の代表的な詩人といえば、多くの人が枕山と成島柳北をあげるであろう。一方の柳北が幕末に詠んだ漢詩についてはかつて拙稿「若き日の成島柳北」(『江戸漢詩』平成十六年、ペリカン社)で触れたこともある。

幕末・維新期に漢詩文は隆盛を誇っていた。しかし明治後期にいたり、漢詩の作者はこういった盛名を得ることができなくなる。これら漢文学の素養は一切絶えたのであろうか。

そうではなく何らかの形で近代文学に活用されたというのが本稿の立場である。以下、『江戸名勝詩』の刊行から八年後、まさに日本橋界隈に生まれた谷崎潤一郎について、彼が漢文学からどのような影響を受けているか、短篇集『刺青』に則し

て見てゆきたい。

『刺青』は明治四十四年に刊行された。「刺青」のほか、「麒麟」、「少年」、「幫間」、「秘密」、戯曲「象」、同じく「信西」を収録する。

有名な小説ではあるが、「刺青」の梗概を次にあげておく（別冊国文学54／谷崎潤一郎必携）平成十三年十一月。六四頁。前田久徳執筆）。

刺青師清吉には、光輝ある美女の肌を得て、それへ己の魂を彫り込むという年来の宿願があった。彼の心に適った女を捜し続けた四年目の夏の夕べ、駕籠からこぼれた白い足を目にし、その持ち主こそ求め続けた女であることを確信するが、駕籠はいず方ともなく去ってしまう。翌年の春半ば、偶然駕籠に乗っていた娘が彼の家へ訪ねて来た。清吉は娘に二本の巻物を見せ、「これはお前の未来を絵にしたものだ」と告げる。絵は今しも刑に処せられんとする生け贄の男を眺める暴君紂王の寵妃末喜を描いたものと「肥料」と題する若い女が桜の幹へ身を寄せて、足下の男たちの屍骸（ひくろ）を見つめている図柄であった。絵の女の性分を持つていることを告白し、絵を恐れて見ようとしない娘に、清吉は麻酔を嗅がせ、一昼夜をかけて娘の背中一杯に女郎蜘蛛の彫り物を仕上げる。それは清吉の魂と全生命を注ぎ込んだものであった。眠りから醒めた娘には臆病なところは微塵もなくなり、清吉に向かって「お前さんは真先に私の肥料（こやし）になったんだねえ」と言い放つ。帰る前にもう一度刺青を見せてくれと頼む清吉の願いに応えて肌を脱いだ娘の背中へは、折からの朝日を受けて燦爛と輝いた。

また「麒麟」の梗概は次のようである（「谷崎潤一郎必携」六五頁。前田氏執筆）。

数人の弟子を従え伝道の旅に上った孔子は衛の国を訪れた。南子夫人の色香の魔力に支配されていた霊公に孔子は道徳の貴いことを語り、私の欲に打ち克つことを説いた。霊公は孔子の感化を受けて夫人の魔力から離れたかに見えた。自分の魅力で孔子を虜にしてみせると嘯く南子は孔子と対面し、「凡界の者の夢みぬ、強く、激しく、美しき荒唐な世

界」を現出する香と酒と肉とをすすめるが、孔子の顔は曇るばかりであつた。孔子の徳も夫人には及ばぬことを示すべく、夫人と靈公が乗った車が、孔子を載せた車を従え都を練り歩いた。一時夫人を離れたかに見えた靈公は再び彼女のもとに戻り、孔子は衛の国を去る。

本稿では『刺青』について述べるまえに、一旦十年ほど遡ることにしよう。

二

明治三十四年十月、数え十六歳の谷崎は「学友会雑誌」に「牧童」と題する詩を発表した（愛蔵版全集第二十四巻）。「第一年級甲組 谷崎潤一郎」と署名がある。

牧笛聲中春日斜。青山一半入紅霞。行人借問歸何處。笑指梅花溪上家。

同じ年の十二月（推定）の「学友会雑誌」にも「護良王」「観月」「殘菊」という三首の漢詩を発表しているのだが、このことはあとで触れよう。彼が詠んだ漢詩で今日知られているものは、この四首である。ただし次に述べる作品を含めると、もう一首あることになる。

谷崎に「神童」（大正五年）と題する中篇小説がある（全集第三巻）。主人公瀬川春之助は拔群の成績で、教師はもとより校長からも褒めそやされる存在であつた。尋常小学校四年生のときのこと、「天の河」と題する作文の課題を出された春之助は、二十分ほど考え、なんと漢詩を制作した（先に「もう一首」と書いたのは、この詩である）。

日没西山外。月昇東海邊。星橋彌兩極。爛々耀秋天。

何かの焼き直しではないかと疑った教師は、春之助に今度は「はつせのや里のうなみに宿問へば霞める梅のたちえをぞさす」という契沖の和歌を訳させようとする。すると春之助は白墨ですらすらと黒板に漢詩を書いてみせる。それが次の詩で

ある。

牧笛聲中春日斜。青山一半入紅霞。借問兒童歸何處。笑指梅花溪上家。

この小説「神童」は「自伝的なものだが、虚構性も強い」（谷崎潤一郎必携）七六頁。細江光執筆）とされている。察するに、「自伝的」とはいえ、さすがに小学生時代の谷崎にこれほどの才能があったわけではなく、自分が十六歳のときに発表した「牧童」を——あるいはその後契沖の和歌との相似に思いついたのであるうか——こういう形で再録したのであるう。なお転句は「行人借問す何処に帰ると」であつたのを、「神童」で「児童に借問す」と改めている。問は仄音、童は平音、何は平音。人は平音だから、平仄としては「行人借問…」の方が整っている。「うなゐ」を漢訳する必要があつたほか、「神童」の詩は即興で詠んだという設定であるから、あまり整いすぎていないほうが相応しいと判断したものか^{注1}。

小学校時代から自在に漢詩を詠んでいたというのがフィクションだとしても、谷崎に漢詩の才能があつたというのは真実であろうか。

前述したように十六歳の谷崎が発表した漢詩の一つに「護良王」がある。南北朝時代、足利氏によって鎌倉の土窟で殺害された大塔宮護良親王を詠んだ詩である。転・結句を訓読しよう。

天闇未掃妖雲影　天闇未だ掃はず　妖雲の影

賊子屠龍土窟中　賊子　竜を屠る　土窟の中

「天闇」は天帝の門衛、また帝王の宮門。結句は足利氏が護良親王を殺したことを指すのであろうが、親王を龍になぞらえ「屠龍」と表現することには多くの読者が違和感をおぼえるであろう。「屠龍」とは『莊子』列禦寇に由来する「実際の役に立たぬわざ」が第一に思いうかべられる熟語だからである^{注2}。

谷崎の漢詩は数も少なく、表現のうえでもこのように、やや未熟な点がみられる。

ちなみにこの明治三十四年は正岡子規の亡くなる前年である。拙稿「若き日の成島柳北」では柳北と対比して、慶応三年

生まれの子規が漢詩を好んで詠みながら、或る時期を境に漢詩の創作から遠ざかったという事情をも論じた（三四六～三五〇頁）。時代的には子規と入れ代わるようにして文学活動を開始した谷崎であるが、或る程度の素養を持っていたとはいえず、子規らの世代と比較しても、漢詩の創作が遠いものになっていたことが窺われる。「神童」の主人公が漢詩に精通していたというのは、自伝としてはフィクションと考えるべきであろう。

谷崎にとつての漢籍の影響は、むしろ漢詩文の表現やレトリックを小説に活用したことに求められる。

四首の漢詩を発表してから三年後の明治三十七年五月、谷崎は「学友会雑誌」に「文藝と道德主義」と題する文章を書いた（全集第二十四卷）。周知の如く、谷崎はそのなかで『列子』天瑞篇を引いている。引用文は漢文に返り点を附したものであるが、その一部を便宜上訓読して掲出する（谷崎は「為憂」「若此」に返り点を附していないが、補って訓読する）。

林類笑ひて曰く「吾の以て樂と爲す所は人皆な之有り。而して反つて以て憂と爲す。少くして行を勤めず。長じて時と競はず。故に能く壽なること此の若し。老いて妻子無し。死期將に至らんとす。故に樂しきこと此の若し」。子貢曰く「壽は人の情なり。死は人の惡むところなり。子、死を以て樂と爲すは何ぞや」。林類曰く「死は之れ生と一往一反す。故に是に死する者、安んぞ彼に生ぜざるを知らん。故に吾其の相ひ若かざるを知る。吾又た安んぞ營營として生を求むるの惑に非ざるを知らんや。亦又安んぞ吾が今の死の昔の生に愈らざるを知らんや」。

さて短篇集『刺青』に収録する「麒麟」はこの六年後、明治四十三年十二月に第二次「新思潮」第四号に掲載された小説である（全集第一卷）。『刺青』を著したころ、すなわち明治末年の谷崎に漢籍の影響がみられることは、徳田進「谷崎文学と中国古典との交渉」（『中国古典と日本近代文学との交渉』七〇～八八頁。昭和六十三年、芦書房）や、西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』（平成十五年、中央公論新社）の第二章「文壇に出るまで」等に詳しく述べられる。それらにも指摘されているが、「麒麟」のなかで『列子』の逸話が忠実にパラフレーズされていることは良く知られている。たとえば次のように。

「わしの樂しみとするものは、世間の人が皆持つて居て、却つて憂として居る。幼い時に行を勤めず、長じて時を競は

ず、老いて妻子もなく、漸く死期が近づいて居る。それだから此のやうに楽しんで居る。」

「人は皆長壽ながいきを望み、死を悲しむで居るのに、先生はどうして、死を楽しむ事が出来ますか。」
と、子貢は重ねて訊いた。

「死と生とは、一度往つて一度反るのぢや。此處で死ぬのは、彼處かしこで生れるのぢや。わしは、生を求めて齷齪するのは惑ぢやと云ふ事を知つて居る。今死ぬるも昔生れたのと變りはないと思うて居る。」

「麒麟」にはほかに種々の漢籍が影を落としている。最も印象的なのは「麒麟」の締めくくりである。

翌くる日の朝、孔子の一行は、曹の國をさして再び傳道の途に上つた。

「吾未見好徳如好色者也。」
われいまだとくをみずいひをこのむとくをこのむもののみならずなり。

これが衛の國を去る時の、聖人の最後の言葉であつた。

此の言葉は、彼の尊い論語と云ふ書物に載せられて、今日迄傳はつて居る。

「色」は美あるいは性と言い換えることもできよう。美または性の力による秩序の崩壊の恐怖または感動というのは、谷崎の生涯を通じてのテーマであつた。想像をたくましくすれば、谷崎はむしろ「吾未だ徳を好むこと色を好むが如くなる者を見ざるなり」という子罕篇の一節に、彼の文学的主題と一致するものを見出だしたがために、孔子を主人公とする小説を書くとしたのではないか、とすら思えてくる。

「麒麟」と漢籍の關係についてはすでに知られた事実の確認であつて、本稿での目的は若き日の谷崎が漢籍に親しみ創作に活用していたことの一斑を見ることであつた。ちなみに、やはり『刺青』におさめる戯曲「象」は、江戸時代の漢詩集『詠象詩』（享保十四年）に言及するが、細部にまでこの詩集にまなんだ形跡があることは、細江光『象』『刺青』の典拠について（笠原伸夫編『谷崎潤一郎「刺青」作品論集成2』。初出は「甲南文学」三十九号（平成四年三月）に詳しい。

谷崎に「異端者の悲しみ」という中篇小説がある（全集第四卷）。この小説は「異端者の悲しみはしがき」とともに「中央公論」大正六年七月号に発表され、同年九月、「晩春日記」等と併せて刊行された。このとき「はしがき」の要約が「序」として巻頭に置かれている。「序」は次のように書く^{注3}。

此の短篇集の大半を占むるものは、云までもなく巻頭の自舒傳小説——『異端者の悲しみ』なり。こは予が唯一の告白書にして懺悔録なり。

顧れば二十五歳の夏、予が初めて文壇に立ちてより、三十二歳の今年の秋に至るまで、七年間に發表したる物語の数は、既に四十篇に垂んとす。そのうち、單に藝術的價値を以てすれば、此の懺悔録に優るもの必ずしも絶無ならざらむ。されど予に取りて最も忘れ難く、最も感慨深きものは實に此の一篇なり。

「異端者の悲しみ」は「自舒傳小説」であり、「懺悔録」であり、主人公（間室章三郎）のモデルは谷崎その人であつた。この「異端者の悲しみ」は、次のように締めくくられる。

それから二た月程過ぎて、章三郎は或る短篇の創作を文壇に發表した。彼の書く物は、當時世間に流行して居る自然主義の小説とは、全く傾向を異にして居た。それは彼の頭に醗酵する怪しい悪夢を材料にした、甘美にして芳烈なる藝術であつた。

章三郎の發表した「怪しい悪夢を材料にした、甘美にして芳烈なる藝術」のモデルは一体何か。それは短篇集『刺青』におさめる「刺青」や「麒麟」に違いない。逆にいえば「異端者の悲しみ」は明治四十四年ごろの谷崎自身をモデルにしたとおぼしいことを確認すれば足りるのだが、その「異端者の悲しみ」に次の一節がある。

其の日も彼は大便所に蹲踞まつたまゝ、例の如くいろいろの愚にも付かない思想の斷片を、次ぎから次ぎへと頭の中に

描いては消し、消しては描き續けたが、そのうちに彼はいつの間にか支那の白樂天の事を考へて居た。

「待てよ、己は昨日も便所の中で白樂天の事を考へて居たやうな覚えがある。」

彼はふと氣が付いて斯う思つた。…………

(中略)

だんだん聯想の流を溯つて探究するうちに、彼は程なく關係を見付け出すことが出來た。ちやうど便所の床板の上に、二三日前の新聞紙の切れが落ちて居て、其の中の箱根の温泉に關する記事が、自然と章三郎の眼につくやうに擴がつて居る。原因と云ふのは恐らく此處にあるらしかつた。温泉の記事を読むともなく讀んで居るうちに、彼の魂は知らず識らず曾遊の地たる箱根の翠嵐にさ迷うて、涼しい谿谷の小川の澗に設けられた、とある旅館の浴室の光景を想ひ出して居た。清冽な、透き徹るやうな湯水が、絶え間なく溢れ出る湯槽の底に身を浸す時の、さながら五體の解れるやうな肌觸りを追懷すると、今度は入浴の快感を歌つた有名な唐詩の文句、「温泉水滑洗凝脂。」と云ふ長恨歌の一節が、古い古い記憶の底から呼び醒された。さうして長恨歌から必然的に、白樂天の聯想が彼の頭に現れ來たのである。

「長恨歌」は白樂天というだけでなく、すべての漢詩のなかで最も良く知られたものの一つである^{注4}。

のみならず「温泉水滑らかにして凝脂を洗ふ」は「長恨歌」の冒頭近くにあるから、章三郎がこの一節を記憶し無意識のうちに思い出したことに、何の不思議もない。ちなみに「長恨歌」は百二十句から成るが、最初の十二句を掲出しよう。

漢皇重色思傾国 漢皇 色を重んじて 傾国を思ひ

御宇多年求不得 御宇多年 求むれども得ず

楊家有女初長成 楊家に女有り 初めて長成す

養在深閨人未識 養はれて深閨に在り 人未だ識らず

天生麗質自難棄 天生の麗質 自づから棄て難く

一朝選在君王側

一朝選ばれて君王の側に在り

廻眸一笑生百媚

眸を廻らせて一笑すれば百媚生じ

六宮粉黛無顔色

六宮の粉黛 顔色無し

春寒賜浴華清池

春寒くして浴を賜ふ華清の池

溫泉水滑洗凝脂

溫泉水滑らかにして凝脂を洗ふ

侍兒扶起嬌無力

侍兒扶け起こせば嬌として力無し

始是新承恩沢時

始めて是れ新たに恩沢を承くる時

この「長恨歌」は、短篇「刺青」に影を落としているのではないか。

「刺青」は、清吉という彫物師が美しい女の足を見、その後彼女に再会して麻酔で眠らせ、その背中に女郎蜘蛛の彫物を施す、という小説であつた。女に再会した場面で清吉はこう言う（全集第一巻）。

「丁度これで足かけ五年、己はお前を待つて居た。顔を見るのは始めてだが、お前の足にはおぼえがある」

ただし清吉が彼女の足を見たのは、五年前のことではない。その直前に「お前は去年の六月ごろ、平清から駕籠で歸つたことがあらうがな」と語っているように、一年前のことだったのである。

奇妙な言い方といわねばならない。清吉は初めの四年間、見たことのない「お前」を待つていたというのだから。

私がこの言葉から思い出すのが「御宇多年求むれども得ず」という詩句なのである。

四

「長恨歌」の冒頭と「刺青」の構造は似ている。

どちらも男が理想の美女を探す物語である。「漢皇色を重んじて傾国を思ふ」に対応するかのように、「刺青」には「彼の年來の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込む事であった。(略)三年四年は空しく憧れながらも、彼はなほ其の願ひを棄てずに居た」という描写がある。さらにいえば「漢皇」とあるが、実際には「長恨歌」は唐の玄宗皇帝をモデルとする。「刺青」もまた幕末を時代背景とすると見えながら、それと明記されることはない^{注5}。

「長恨歌」に「一朝選ばれて君王の側に在り」とあるのに呼応するように、「刺青」でも或る日再会した女は清吉のもとにとどめ置かれる。その後、刺青を施された女は入浴し、「いたはる清吉の手をつきのけて、激しい苦痛に流しの板の間へ身を投げたまゝ」、「あゝ、湯が滲みて苦しいこと」とつぶやく。この描写もまた「侍兒扶起起こせば嬌として力無し。始めて是れ新たに恩沢を承くる時」という「長恨歌」の詩句を連想させるのである。

これも、第二章で言及した西原氏の『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』に紹介されていることだが(六二・一一九・一二六頁)、谷崎は大正十一年、「支那趣味と云ふこと」という文章を書いている(全集第二十二巻)。彼は「私は時々二十年前に愛讀した李白や杜甫を開いて見る。(略)私のデスクの左右にある書棚の上には、亜米利加の活動雑誌と共に高青邱や呉梅村が載つて居る」と書き、さらに次のように述べる。

一と度び高青邱を繙くと、たつた一行の五言絶句に接してさへ、その閑寂な境地に惹き入れられて、今迄の野心や活潑な空想は水を浴びたやうに冷えてしまふ。「新しいものが何だ、創造が何だ、人間の到り得る究極の心境は、結局此の五言絶句に盡きて居るぢやないか」と、さう云はれて居るやうな氣がする。私はそれが恐ろしいのである。

此の後の私はどうなつて行くか、——今のところでは、成るだけ支那趣味に反抗しつゝ、やはり時々親の顔を見たいやうな心持で、こつそりと其處へ歸つて行くと云ふやうな事を繰り返してゐる。

谷崎は昭和二年に發表した「饒舌録」のなかでもこの一節を引き、「この誘惑は今も變りがないばかりか、却つてだんく強められ、深められて行くのである」と書いているのだが、ここという「支那趣味」は、高青邱の詩などの漢籍に親しみま

なぶような傾向と解することができる。こういった「支那趣味」に彼がひたっていたことは、「長恨歌」が「刺青」に影響している可能性に有利な傍証といえるように思う。短い五言絶句からさえも深遠な真理を読み取ることが可能なら、まして長篇の古詩から短篇小説のプロットをまなぶことは遙かに容易と思われるからである^{注6}。

あるいは大正九年に発表された「藝術一家言」（全集第二十三巻）には、「楊王盧駱當時の体、輕薄に文を為り晒ひて未だ休まず。爾曹身と名と俱に滅ぶ。廢せず江河万古流るるを」という杜甫「戲為六絶句」や同じく「夢李白」を引きつつ、自己の藝術觀を述べた箇所もある。

「藝術一家言」にはまた、里見弴の「恐ろしき結婚」に触れて、「昔杜子美は『語つて人を驚かさずんば死すとも休まず』と云つた、その氣魄が、此の作品の隨所に溢れて居る」と述べた箇所もあり、こういった記述にも谷崎の「支那趣味」はみとめられよう。

以上、本稿では「刺青」について、実証を伴わずプロバビリティの問題でしかない仮説を述べてきた。刺青を施されたあと入浴するのは何もこの女にかぎったことではないから、「長恨歌」の影響をここに見るべきではないのかも知れない。ただし、箱根の記事を見ただけで「温泉水滑らかにして凝脂を洗ふ」の詩句を思い出したという、「異端者の悲しみ」の記述がもし正確なものとするならば、湯にはいつてぐったりとした女を描写するときに「長恨歌」を谷崎がまったく思いださなかったというのは、かえって不自然であると私はおもうのである。

もとより谷崎が「長恨歌」の描写を意識的になぞったというのではない。もし両者に一致する点があるとしても、それはむしろ無意識の出来事であつただろう。ちょうど「異端者の悲しみ」の主人公が便所で「長恨歌」を思いだした理由が、初めは本人にもわからなかったように。

これは漢詩文とは無関係だが、死後に刊行された『雪後庵夜話』（全集第十九巻）のなかで谷崎は、歌舞伎『義経千本桜』が自作にあたえた影響について語っている。

大正十二年の正月の雑誌「新潮」に私は「白狐の湯」と云ふ戯曲を載せてゐる。今から四十年前で、三十七歳の時の作であるから、明治座で五代目菊五郎を見た時から勘定すれば二十七年前のことになるが、こゝにも私は幼い時の千本櫻の影響があることを感ずる。

あの戯曲を書いた時は全くそれを意識してゐなかつたけれども、後になつてそれに氣づいた。この戯曲の中で、白人女のローザに化けた親狐が角太郎を攫つて行くところで、

土手の岸に生ひ茂つてゐる萩の花がざわ／＼と鳴つて、花の下にべつたりと身をひれ伏して隠れてゐた二匹の仔狐が現はれる。白繻子のやうにピカピカ光る美しい縫ひぐるみを着てゐる。そして、ひよいと丸木橋の上へ跳んで出て、親狐の方を見てびよ／＼お時儀をする。

とあるが、これは明かに千本櫻の七幕目「川連法眼館の場」で、菊五郎の横川覺範が^{よしかの}大勢の仔狐を踏まへてせり出しになる時の場面が頭にあつたのだと思ふ。(中略) 武州公秘話の法師丸を恍惚境に惹き入れた死人どもの首、「首は女の力では相當に重いもので、髪の毛をくる／＼と幾重にも手頸に巻き付ける。さう云ふ時にその手がへんに美しさを増した。のみならず、顔もその手と同じやうに美しかった」とあるそれらの首や女どもと、小金吾の首や若葉の内侍の艶姿とは表面何の關係もないやうに見えつゝ、やはり何かしらつながりがないとは云へない。(中略) そんな工合に考へて來ると、まだこの外にも千本櫻の影響が、さまざまの形でいろいろの方面に現はれてゐるやうに思ふ。

谷崎はさらにあとの方でも、『細雪』の三姉妹に触れて「この姉妹たちの袂にも千本櫻の花の雨が降り注いでゐたやうに思ふ」と書いている。

創作における影響関係というのは、そんなものである。ときには作者自身ですら「後になつてそれに氣づいた」、あるいは「何かしらつながりがないとは云へない」としか言いようがないのである。その意味で本稿のような議論は水掛け論を出ないものかも知れない。

ただし漢詩と創作の関係について、あるいは谷崎と同じようなことをおこなったかと思われる人物がいる。成島柳北を尊敬し、大沼枕山ゆかりの者でもあった永井荷風が、その人である。

五

谷崎が明治四十四年十一月、荷風に絶賛され文壇に華麗にデビューしたことは良く知られている。その九年後の大正九年、荷風は「雨瀟瀟」という小説を「新小説」に掲載した。おもな登場人物は、金阜山人、その友人彩箋堂、小半という女性。小半はかつて彩箋堂に身請けされたが、若い活動辯士と恋に落ち、彩箋堂と別れてふたたび左棲を持つにいたるという小説である。

この小説は白居易や明の王彦泓^{げんこう}、我が国の森春濤の漢詩を引くなど、谷崎のいわゆる「支那趣味」の濃厚な作である。のみならずプロットが、司空曙「病中遣妓」(『三体詩』)に由来するという説がある。池澤一郎『雨瀟瀟』私見(『江戸文人論』平成十二年、汲古書院)である。

万事傷心在目前　　万事の傷心　　目前に在り

一身憔悴対花眠　　一身憔悴して花に対して眠る

黄金用尽教歌舞　　黄金用ひ尽くして歌舞を教へ

留与他人楽少年　　他人に留与して少年を楽しましめん

池澤氏は次のように書く(四四五頁)。

本詩において「歌舞」を江戸音曲(蘭八節)に、「他人」を若い活動辯士と見なせば、一見する所いささか単純とも思われるこの随筆体小説のプロットと合致するのである。先引彩箋堂主人の書簡末尾の「實の處三百錢落したより今少し

惜しいやうな心持一貫三〇位と思召被下べく候」も「黄金用い盡くして」を敷衍したものに他ならない。

すなわち荷風は唐詩から小説のプロットをまなんだ可能性があるとのである。

実は『断腸亭日乗』によれば、荷風は「雨瀟瀟」の原型である「紅箋堂佳話」という作品を大正六年十二月十日に起草している。大正六年十二月という年次がいかに示唆的である。荷風は同じ年に発表された「異端者の悲しみ」を読み、かつて絶賛した「刺青」を記憶の底から思い起こし、技癢をおぼえたのではないかとすら想像される。

ちなみにこれも池澤氏が指摘するところだが（四四二頁）、「雨瀟瀟」には秋海棠への執着がたられる。そして『断腸亭日乗』昭和五年七月一日の日記にも、秋海棠に関して次の一節がある。

晴れて風爽なり、門前の夾竹桃花ひらく、秋海棠の花黄梅の時節未だ過ぎざるに早くも一二輪ひらきそめたり、時候不順のためなる歟、客間の壁に先考の書幅秋海棠の作を懸く、乃次の如し、嬌似華清浴後姿、断腸人立夕陽時、前身薄命憑誰訴、今日紅妝不自持、傍砌依牆憐寂寞、啼烟泣露滴胭脂、多情本是深宮種、仍向秋風繫所思、

「先考」すなわち永井禾原の「秋海棠」は『来青閣集』巻十に収録。第一句「嬌なること華清浴後の姿に似たり」は明らかに「長恨歌」を踏まえている。

勿論荷風もそれを知っていたに相違ない。荷風が「長恨歌」の冒頭を熟知していたならば、「刺青」を読んだとき脳裏に「長恨歌」がよぎることは、絶対になかったとは言いきれないであろう。

明治末年、谷崎は『論語』の幾つかの章と『列子』をもとに、短篇小説「麒麟」を書き上げた。戯曲「象」は江戸漢詩である『詠象詩』をも参考にしていた。前後して彼は「刺青」も著したが、こちらはおそらく無意識のうちに「長恨歌」をなぞったものであった。もし荷風が小説を書くに際して司空曙の詩を活用したという説が正しいとすれば、そのヒントになったのは短篇集『刺青』の手法であった可能性も考えられよう。

最後にもう一点つけ加えておく。第四章で「饒舌録」に言及した。その「饒舌録」のなかで谷崎は「身邊雜記や作家の経

験をもとにしたもので、イヤ氣にならずに、どん／＼引き摺って行かれるやうな作品はめつたにない。數年前に讀んだ永井荷風氏の『雨瀟瀟』、近松秋江氏の『黒髪』、——まあ此の二つが記憶に残つてゐるくらゐなものだ』とも書いている。

のみならず荷風没後の昭和三十七年、岩波書店から「荷風全集」が刊行されることになり、谷崎も内容見本に「思ひ出」と題する文章を寄せた（全集第二十三巻）。谷崎は「私は荷風先生に對していろいろ相濟まないことをしてゐると云ふ氣持が強い。（略）濟まないと思ふことの第一は、もう長いこと故先生の著作を讀み返してゐないことである」と述べたあと、次のやうに書く。

せめて限定版の「腕くらべ」ぐらゐは、幸ひ活字が大きいのだから機を得てゆつくり讀み直さうと思つてゐるけれども、それもまだ果してゐない。その他には先づ「雨瀟瀟」と「冬の蠅」である。

谷崎はこのやうに「雨瀟瀟」への偏愛を繰りかえし語っている。

漢詩文にプロットをまなんだ可能性のある『刺青』を荷風は激賞し、青年谷崎は文壇に出た。半世紀ののち、やはり漢詩にプロットをまなんだ可能性のある荷風の「雨瀟瀟」を老谷崎が懐かしんでいることは興味深い^{注7}。

ちなみに「長恨歌」は「此の恨みは綿綿として絶ゆる期無からん」と結ばれる。これも荷風の尊敬する文豪であつた森鷗外が、『即興詩人』の一節を「ベルナルドオナかりせば、彼人は不幸に陥らで止みしならん。（略）嗚呼、絶ゆる期なき恨なるかな（末路）」と訳したのは、この詩句に基づく。その鷗外は小説「舞姫」を「我脳裡に一点の彼を憎むこゝろ今日までも残れりけり」と結んだが、「この一句はあるいは白楽天の『長恨歌』の結びの一句によつたものであらうか」（川口朗注『森鷗外全集8』筑摩書房）という推測がある^{注8}。かりにこの推測が正しいとすれば、「長恨歌」の詩句は變形されつつ明治文学に影響をおよぼし得たという意味で、拙論を補強するといえるであらう。

注

- 1 なお原田親貞「中国文学と谷崎潤一郎（一）」（『学苑』三百四十八号四五―六〇頁。昭和四十三年十二月）は「麒麟」「異端者の悲み」等におよぼした漢籍の影響を詳しく論じ、「神童」にこの漢詩が用いられていることにも言及している。
- 2 『莊子』の件の箇所を、便宜上「新釈漢文大系」に従って訓読しておく。「朱泚漫は、龍を屠ることを支離益に学ぶ。千金の家を単し、三年にして技成りて、而も其の巧を用ふる所無し」。
- 3 のち昭和三十三年、谷崎は新書版『谷崎潤一郎全集第六卷』に「異端者の悲しみ」を収めるに際し、この数行を除いている。
- 4 ちなみに谷崎に中篇小説「春琴抄」がある。いうまでもなく盲目の女性が熱湯を顔に浴び火傷を負わされる物語であるが、火傷を負ったあとの主人公を描写して「事實は花顔玉容に無残な變化を來したのである」と書かれている。「花顔玉容」は「長恨歌」の「雲鬢花顔金步搖」「玉容寂寞淚闌干」という詩句にもとづくか。
- 5 「刺青」の時代背景の曖昧さについては、高橋俊夫『「刺青」と江戸・深川』（笠原伸夫編『谷崎潤一郎「刺青」作品論集成2』。初出は『芸術至上主義文芸』五号（昭和五十四年十一月））に指摘がある。
- 6 大正後期の谷崎の作品では、『蘇州紀行』（大正八年）や小説『西湖の月』（同八年）、蘇東坡を主役とする戯曲「蘇東坡」（同九年）などに、書物をおして知っていた古典の知識にもとづく面がみられる。「蘇州紀行」は漢詩を引用しつつ自らの旅の出来事をするした紀行文。「西湖の月」は、旅先で見た水死体を名妓蘇小々と二重写しにしてえがく。「西湖の月」の冒頭ではまさしく高青邱の詩も引かれる。
- 7 なお『冬の蠅』は随筆集であるが、書名を其角の発句に得ている。
- 8 『新日本古典文学大系明治編25森鷗外集』（須田喜代次ほか校注、平成十六年）四二二頁参照。

（附記）

本稿は、平成十七年一月の和漢比較文学会の例会発表にもとづきます。